

## 1946年南海地震の震源

### Hypocenter of the 1946 great Nankai earthquake

岡野 健之助 [1], 中村 正夫 [2], # 木村 昌三 [3]

Kennosuke Okano [1], Masao Nakamura [2], # Shozo Kimura [3]

[1] 高知大, [2] 東大・地震研・観測センター・和歌山, [3] 高知大・理・地震観

[1] Kochi Univ., [2] Wakayama Obs., Observation Center, ERI, Univ. of Tokyo., [3] Earthq.Obs., Sci., Kochi Univ.

1946年南海地震の震源については、地震波の到達時を用いて気象庁（1982）、金森（1972）、浜田（1987）によって、さらに当時の機械式地震計の特性を利用して岡野（1988）によって求められている。これらの震源と現在の微小地震観測から得られる震源分布や地殻構造との関連性に基づいて、岡野（1988）の震源位置の妥当性が高いことを論ずる。

1946年南海地震の震源は気象庁（1982）、金森（1972）および浜田（1987）によって求められている。これらのほとんどはJMAによって観測された初動時刻を用いて求められているが、当時の記録は刻時の精度が不十分であるうえに、震源が海域のために納得のいく震源の位置が得られたとはいえない。岡野（1988）は、京都大学阿武山および上賀茂地震観測所のウイ - ヘルト地震計の記録に加え、当時の機械式地震計の特性を生かして、初動のベクトルの向きとP-S時間を使って妥当な震源の位置を求めている。最近観測点が増設され、しかもWINシステムの情報処理技術が取り入れられて、震源決定が容易になったので、南海地震の震源と考えられる紀伊半島の南端海域における微小地震について豊富な震源情報が得られるようになった。木村・岡野（1998）によればこの地域における、マントル地震が発生する、ほぼ5kmの厚さをもった地殻下の層が南海地震の震源域であることから、この領域に入る岡野（1988）の震源が最も妥当であると推測される。他の震源は地震のほとんど起きていないアセノスフェア内に入るので適当な位置とは思われないが、この領域における震源分布や地殻構造については不明な点が多いので、なお検討する必要がある。これらの震源の位置は南下がりの地殻地震の分布域と北下がりのマントル地震の分布域との接触面付近にあるので、現在その地域に発生する地震の震源分布や、メカニズム等についての情報を得ることは次の南海地震発生の予測に有効であるとも考えられるので、調査した結果を述べる。